話し手の近くにある事物を指す指示詞thatに関する一考察

竹田　完次

キーワード：　指示詞that、話し手の近く、照応的指示、既定的前提

1．目的と方法

英語の指示詞について、thisは話し手の近くにある事物を、thatは話し手から離れたところにある事物を指すとされている。しかし、thatには２節以下に提示するように、一見話し手の近くにある事物を指しているとみえる現象がある。このような現象についてはすでに小笠原(1984)や国広(1985)などで断片的に扱われ、また、千葉・村杉(1987)では豊富な実例を挙げ、個々について興味ある考察がなされている。しかし、統一的な説明はまだ十分にはなされていない。本研究では、話し手の近くにある事物を指す指示詞thatは照応的用法であること、また、その指示対象に対して、話し手は中右(1981)のいう「既定的前提」をもっていることを主張して、５節でその検証を試みる。

データはコミックや現代小説から採集した。コミックから採集したのは、指示対象が話し手の近くにあることを明確に示せるからである。

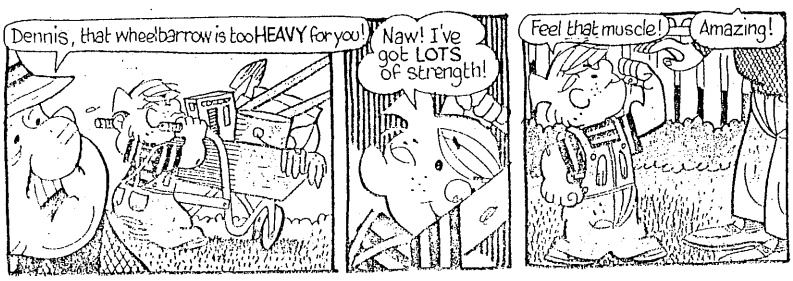
2．先行研究

話し手の近くにある事物を指す指示詞thatとは、次のような場面におけるthatである。

(1)

(2)

(3)

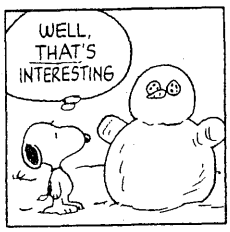


上例のような環境でthatが使われることについて、Lyons(1981:235)は話し手が手に持っているものに嫌悪して感情的な距離を置いているためであるとし、小笠原(1984)もまた指示物に心理的距離を置いているためであるとする。しかし、(2)や(3)の３コマ目のように、指示物を誇示して

いる場面でもthatが使われることがあり、その説明は適当ではない。

また、Fillmore(1982:46)や国広(1985)は上例のような現象について、話し手が聞き手の視点に合わせるためであるとする。この説明は上例のような聞き手の存在する場面では有効である。しかし、次のような聞き手のいない独り言を言っている場面では視点の観点から説明することができない。

(4)



(5)

なお、千葉・村杉(1987)では、日本語の「これ」に相当するthatの多くの実例がコミックから採集され、また、上述の「心理的距離」説あるいは「視点」説に対する反例も提示されている。だが、このようなthatは何を指示しているのか、あるいは、どのような状況で用いられるのかなどの十分な説明がなされていない。次の例にみられるthatについては、ただ、文脈指示であると指摘するにとどまっている（この用例は２例あるが１例だけ引用する）。

(6)（学生が料理人の婦人に対して）

学生Ａ：Miss Beazly, may we borrow some garbage?

料理人：Are you making fun of my cooking?

学生Ｂ：No, ma'am! We need it for science! Mr. Flutesnoot is going to attempt to generate electricity from fermenting organic material!

料理人：（びんを手に持って）Well, here's a jar of stale currants! Maybe he can get a charge out of <u>that</u>!

(6)のthatは、手に持ったjar of stale currantsを現場指示的に指すのではなく、先行の名詞句a jar of stale currantsを、文脈指示的に受けていると言う。

３．本研究におけるthatの指示対象

3.1. 照応的用法について

前節でみた(6)のthatは、明らかに先行の文脈を指示する照応的(anaphoric)な用法である。手に持っている物を直示的(deictic)に指示しているのではない。照応的用法とは、指示詞がテキスト内の前方あるいは後方にある文脈や語句（先行詞）を指示する場合をいうのがふつうである。これに対して、直示的用法とは、テキストの内に先行詞がなく、テキストの外にある指示対象を初めて指示する場合をいう。例えば、談話の場に存在する桜の木を初めて指して"That's a cherry tree."と言えば、そのthatは桜の木を直示することになる。すると前節の(2)や(4)と(5)などのように前にも後にも文脈のない状況で使われているthatは直示的用法になる。だが、本研究では、それらも含めて前節の(1)～(5)におけるような話し手の近くにある事物を指すthatはすべて、照応的用法であると主張したい。それは上例のおいて、先行文脈を指示するもののほかに、

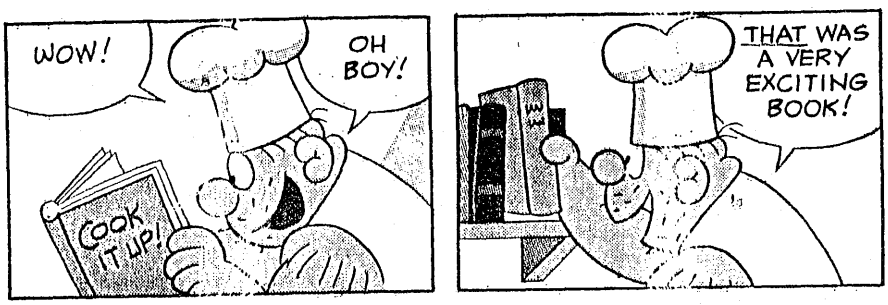
頭の中に反射した指示物のイメージあるいは指示物についての観念や概念それに記憶といったものを指示対象にして、それを照応的に指示していると考えるからである［注１］。

２節の個々の例について言うなら、(1)のthatは２コマ目の先行詞my defaced cardあるいは頭の中で概念化されたmy defaced cardを、(2)はmud-pie（どろのパイ）を作るという遊びの最中で、that texture（このきめこまかさ）のthatは話し手の頭の中にあるmudpieを、(3)のthat muscleのthatは先行文脈であるgetting lots of strengthをそれぞれ指している。次の(4)のthatは目の前の雪ダルマについての頭の中に形成されたイメージを指し、(5)はその読んでいる本あるいは活字を指示するのではなく、やはり頭の中に記憶されたその内容を指すのである。千葉・村杉にある場面も同じように説明することができ、それらの場面において、話し手の視線は指示物に向いているのではなく、あちらの方向に向いているか宙に浮いているかのような光景が想像できる。

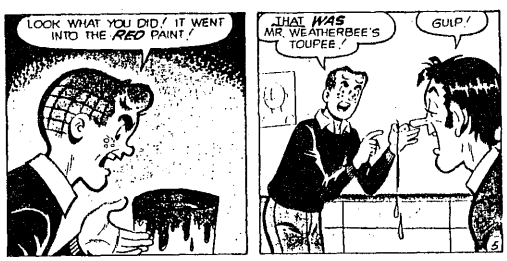
3.2. 証拠

２節におけるthatが現実界に存在する指示物を直示的に指示していないという一つの証拠として、次の例のように、"That was ～"の形でthatが非直示時制である過去形と共起することが挙げられる。これらのthatは、すでに表出ないし記憶された文脈や観念を照応的に指示するため、過去形と共起したのである。

(7)



(8)

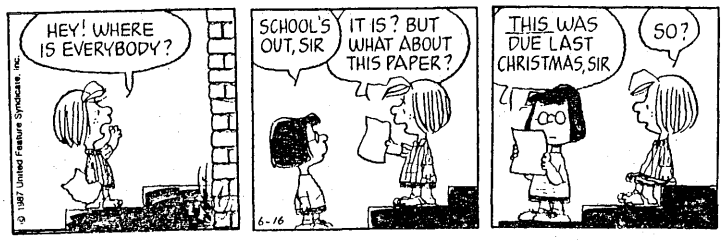


(9)

上例のそれぞれのthatは、(7)では刺激的だった読書の内容を、(8)では１コマ目での赤ペンキの中へ入れたものを照応的に、(9)はいま話し手が報告したばかりのレポートの内容を指している。

しかし、thisが"This was ～"の形で過去形と共起しないというわけではない。次の例の３コマ目のように過去形とも共起するのである。

(10)



'That was ～'と'This was ～'の違いは、'That was ～'の形では、過去の状態であるのはthatの指示内容のことになる。(7)～(9)において、本を読んだこと、赤ペンキの中へ入ったこと、レポートを報告したことなどがすでに過去の状態にあると話し手は意識しているのである。それに対して、'This was ～'の形では、過去の状態であるのはwasの後方の要素になる。(10)では、(ペーパーの)提出期限がすでに過去になっているとしているのであり、thisは手に持っているペーパーを直示的に指していると考えられる。言い換えると、'That was ～'と'This was ～'とでは、wasの及ぼす作用域(scope)が異なるのである。(7)′～(10)′のように、'That was ～'のwasの作用域は前方にあり、'This was ～'のwasの作用域は後方にあるのである。そのため、'That was ～'のthatはすでに頭の中にあるイメージや記憶を指すことになる。

(7)′ [That] was a very exciting book!

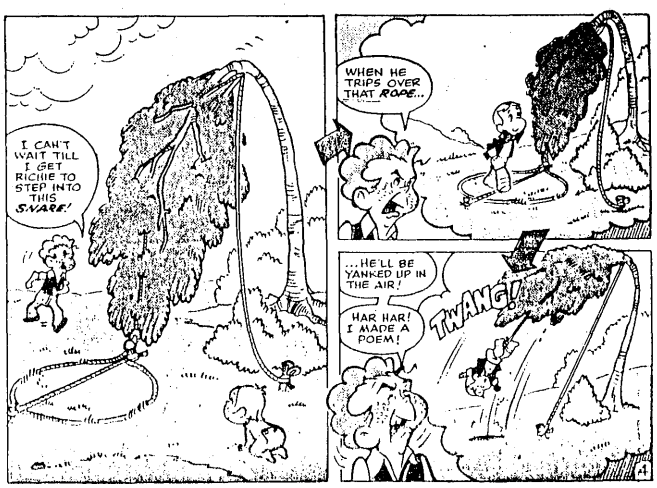
(8)′ [That] was Mr. Weatherbee's toupee!

(9)′ [That] was my report, sir.

(10)′ This was [due last Christmas], sir.

次の(11)のような場面も、上例のthatが指示しているものは、目の前にある指示物ではなく、頭の中にインプットした指示対象であるという証拠になる。1コマ目で仕掛けたわなを指示するのにthisが使われているのは、それが話し手の近くにあり直示的に指示するためであろうが、2コマ目で話し手が空想する状況になると、頭の中で描いている指示対象についてのイメージをthatで照応的に指示しているからである。

(11)



4. 本研究におけるthatの特徴

4.1. 既定的前提

上例のような話し手の近くにある事物を指すthatが指示しているものは、現実の場にある具体物ではなく、頭の中に移行した抽象物を照応的に指している。話し手の近くにある具体物はthisで指示するのがふつうである。そこでもう一度、上例で使われているthatを観察すると、それらは頭の中に移行した抽象物を指すため、話し手は指示対象を知覚してからそのようなthatを発するまでである時間を経ていることが、それぞれの文脈や状況からわかる。そして、話し手は指示対象に対して中右(1981)のいう「既定性」(anaphoricity)あるいは「既定的前提」(anaphoric presupposition)をもっていると仮定できるのである[注2]。「既定的前提」と呼ばれる概念は次のように定義されている。

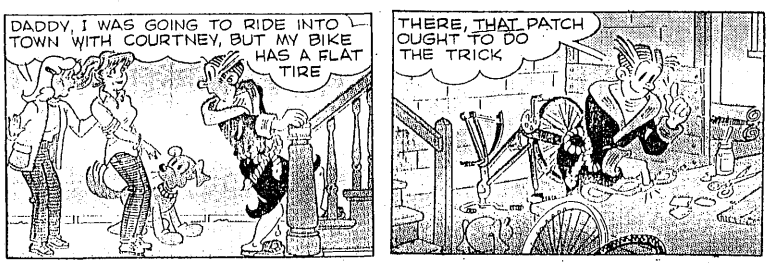
(12) ある事柄の知識(概念、命題)が、発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題として、話し手の意識のなかにあるとき、その知識は既定的である。

まず、(1)〜(3)それに(8)と(9)を見ると、指示している事柄はその談話の場のメイントピックであるため、すでに話し手の意識のなかに確定した話題としてある。次に、(4)と(5)や(7)では、Well、Hmmmm…、Wow! Oh boy!などから、指示対象を知覚してthatを発するまで少し時間を経ていることがわかる。その間に話し手は指示物を意識のなかに定着させ、具体物から抽象物へ移行させていると考えられるのである。

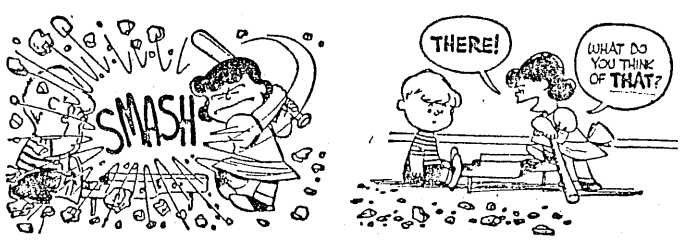
4.2. 完了した行為や状況

thisとthatの一側面として、Swan(1980:Entry 603)は、thisは継続中の事柄について、thatは完了した行為や状況について言及するのに使われると言う。thatが完了した行為や状況について言及するのに使われるのは、次の例のように、すでに話し手の意識のなかに確定した話題となっているためである。(13)では、thatはthereと共にパンクしたタイヤの修理がやっと完了してそのことが意識のなかに定着したことを表し、(14)のピアノの上にあった置物を壊した場面では、thereと共起してその行為が確信的なものであったことを表している。

(13)



(14)

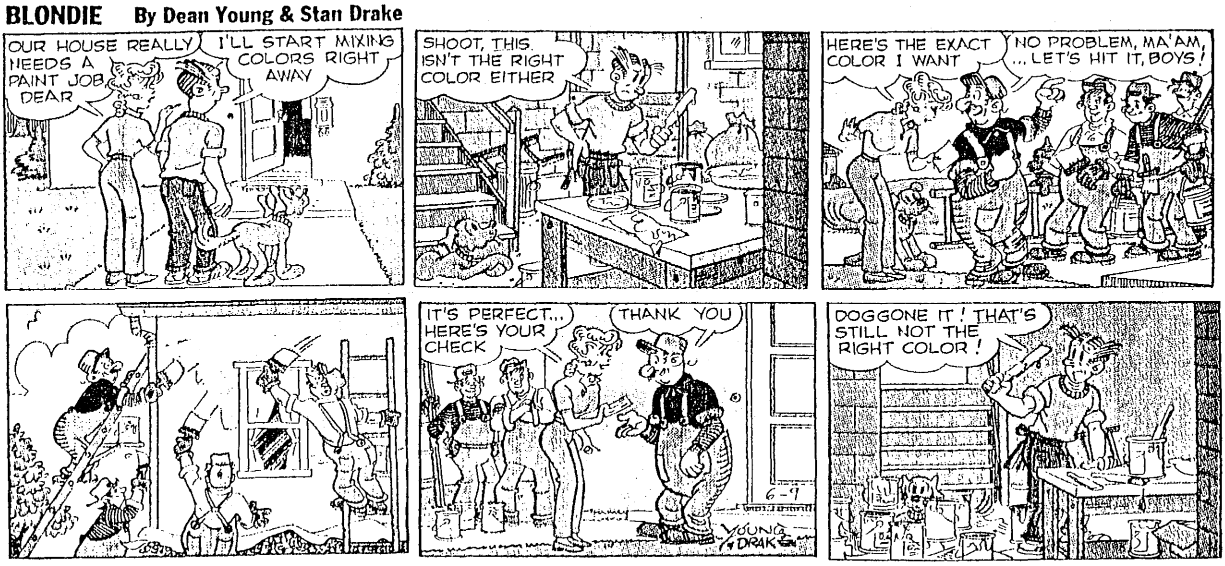


次の例では、行為や状況が継続中であるが、thatが使われている。それは指示対象がすでに話し手の意識のなかに定着しているからである。指示対象が話し手の意識のなかに定着すれば、行為や状況が継続中であってもthatで指示できるのである。その結果、(15)の場面では、その行為がある時間を経ていることを表している。thisであれば、その行為が今はじまったばかりかある時間を経ているのかは不明である。(16)は、家のペンキを塗り替える場面である。２コマ目では、よい色を作ることができないという状況がまだ意識のなかに定着していないため、手に持っている指示物を直示的にthisで指していると考えられる。しかし、最後の６コマ目では、なおよい色を作ることができないという状況が意識のなかに定着しているため、指示対象が頭の中へ移行し照応的にthatで指しているのである。

(15)

(16)

BLONDIE By Dean Young & Stan Drake



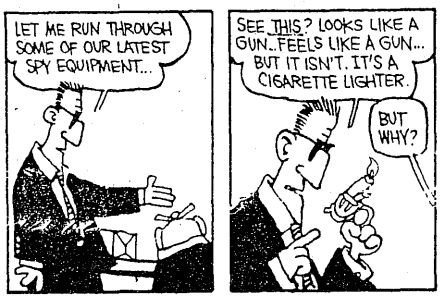
4.3. 共有の知識や経験

(16)の２コマ目の場面では、指示対象がまだ頭の中に移行していないため、照応的指示ができないと考えた。しかし、常にthisの指示対象が非既定的に、thatのそれが既定的になるわけではない。thisもthatも既定的あるいは非既定的指示対象を指示することはできるのである。ただ、本研究で問題にしているthatは、既定的指示対象を照応的に指示している。そのthatの代わりにthisを用いた場合、話し手の近くを直示的に指示していると考えられるが、指示対象は既定的である場合と非既定的である場合とがある。

さて、thatは話し手と聞き手の共有の知識や経験を指示する（Leech & Svartvik(1975:59), Quirk et al.(1985:375)）というもう一つの側面がある。共有の知識や経験を指示するとは、両者の記憶にある事柄を照応的に指示することである。また、共有の知識や経験とは、話し手が聞き手も（既定的でないにしても）既知であり容易に同定できると想定する指示対象である。上例の聞き手の存在する(1)～(3)や(8)と(9)それに(14)などの場面における指示対象がそのような指示対象であり、そのため照応的にthatで指示することができたのである。次の(17)と(18)の場面では、話し手は、指示対象について既定的前提をもっていると考えられるが、聞き手との共有の知識ではないと想定している。このような場合、（聞き手は容易に指示対象を同定することができないため）照応的に指示することができず、現実に存在するものを直示的に（(17)と(18)ではthisで）指示することになる。

(17)

(18) ROBOTMAN



次の(19)では話し手の手に持っている新聞を、また、(20)では話し手自身の頬の傷跡を、"You see that?"あるいは"See that?"のようにthatで指示している。この二つの場面のそれぞれの指示対象について、話し手にとっては既定的であると考えられる。が、聞き手にとっては先行文脈がなく、話し手との共有の知識でもない未知のものである。それにもかかわらず、照応的にthatで指示するのは、一方的に聞き手も既知であるかのように想定して、ある種の効果を作り出すためである。(19)では、話題の中心はトロッター刑事のことのようであるが、突然手に持っている新聞をthatで聞き手に示すことで、話し手の頭の中の関心事はその新聞であったことを表し、聞き手にそれを強制的に同定させる。(20)では、頬の傷跡を示してからその傷跡を指して"See that?"と発するまで少し時間を経ていることが卜書きから窺われるが、thatを使うことで、そのことが推測され、その間に聞き手がその傷跡の事情について理解したと話し手が一方的に想定していることを表す。

(19)（この場面までのあらすじは次の通りである。Mollieは刑事Sergeant Trotterから夫Gilesが昨日殺人事件のあったロンドンへ行ったのではないかと問われる。夫は昨日他の町へ行ったと思っているので否定するが、刑事は夫のオーバーのポケットからロンドンで売っている夕刊紙を発見したと言い、Mollieにそれを渡して部屋から出ていく。その後に、Christopherが現われる）

Mollie: I hate him--I hate him--I hate him.

Christopher: Who?

Mollie: Sergeant Trotter. He puts things into your head. Things that

aren't true, that can't possibly be true.

Christopher: What is all this?

Mollie: I don't believe it--I won't believe it...

Christopher: What won't you believe? Come on--out with it!

Mollie: (*Showing the paper*) You see that?

Christopher: Yes.

Mollie: What is it? Yesterday's evening paper--a London paper. And it was in Giles' pocket. But Giles didn't go to London yesterday.

(Christie, *The Mousetrap*)

(20) (Sir Wilfridは弁護士。ある女から検察側の証人であるRomaine Voleに不利な証拠物件(1行目のtheseで指すもので手紙のこと)を手に入れようとしている)

Sir Wilfrid: How did you get hold of these?

Woman: That'd be telling?

Sir Wilfrid: What have you got against Romaine Vole?

(*The* woman *crosses to the desk, suddenly and dramatically turns her head, swings the desk lamp so that it flows on to her face on the side that has been turned away from the audience, pushing her hair back as she does so, revealing that her cheek is all slashed, scarred and disfigured.* Sir Wilfrid *starts back with an ejaculation.*)

Woman: See that?

Sir Wilfrid: Did she do that to you?

(Christie, *Witness for the Prosecution*)

4.4. 他の照応詞(the, it)との違い

本研究が問題としているthatは既定的指示対象を指示する。また、話し手と聞き手の共有の知識・経験を指示する。しかし、他の照応詞である定冠詞theや代名詞itもまた既定的指示対象や共有の知識・経験を指示するという側面がある。Hawkins(1978:103)やGundel et al.(1989:89-90)によれば、次の(21)のthe dogとthat dogの違いは、それぞれの文の発話時点で、(21a)の方は聞き手がその犬を見ることができなくても、また、聞き手がその犬について知らなくても使える。しかし、(21b)の方は聞き手がその犬を見ることができるか、その犬のイメージ(mental representation)が頭の中にないと使うことができないとする。

(21) a. I couldn't sleep last night. The dog next door kept me awake.

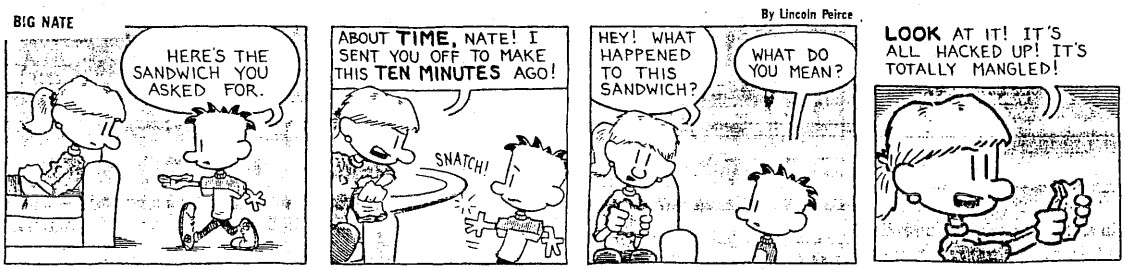
b. I couldn't sleep last night. That dog next door kept me awake

Gundel et al.(1989:90)では、次の(17)のような指示対象の名詞を伴わないthatが犬のほえ声を指示していると理解されるのは、談話の初めに犬のほえ声についてすでに言及しているかあるいは談話の最中に犬がほえている場合であるとする。

(22) I couldn't sleep last night. That kept me awake.

(21)と(22)から、thatは本来指示詞であるため、照応詞として使えるのは指示対象の具体像がイメージできる環境であると言える。実例である次の(23)の４コマ目の"Look at it!"と(1)の３コマ目の"Look at that."を比べることにしよう。

(23)



(1)

(23)の４コマ目ではサンドイッチがhackされ、mangleされていることを示し、(1)の３コマ目では成績表がdefaceされていることを聞き手に示している。どちらも同じような場面に見える。しかし、前者では話し手が"Look at it!"の発話時点で、itの指示対象がhackあるいはmangleされているということには言及していない。後者では"Loot at that."の発話時点でthatの指示対象がdefaceされていることにすでに言及しており、聞き手は話し手が想定する指示対象の具体像について既知と想定できるのである。

(23)の"Look at it."と(1)の"Look at that."はまたその力点が異なっている。前者では動詞Lookに力点があり、指示対象よりまずそれを見る行為を求めることに力点がある。後者ではthatに力点があり、その指示対象に注意を求めることに力点がある。話し手にとって、itは「既定的命題に代わる定代名詞」（中右(1981:428)）であり、(1)のthatも既定的指示対象を指す。そこで、itの指示対象はあえて聞き手の注意を喚起するまでもないものあるいは文脈上その必要もないもの（ときには聞き手がその具体像を知らないため、注意を喚起できないもの）であり、thatの指示対象はその存在に聞き手の注意を喚起する必要があるものであると言える。

次の(24)のitは相手の刑事の身分証明書を指す。刑事に訪問された一行目の話し手は、刑事が訪問する際、身分証明書を呈示することは当然であり、注意を促すまでもないと想定している。話し手の力点は、身分証明書より聞き手がそれを見せる行為にある。

(24)（訪問してきた刑事に対して）

"Let's see <u>it</u>," he snapped.

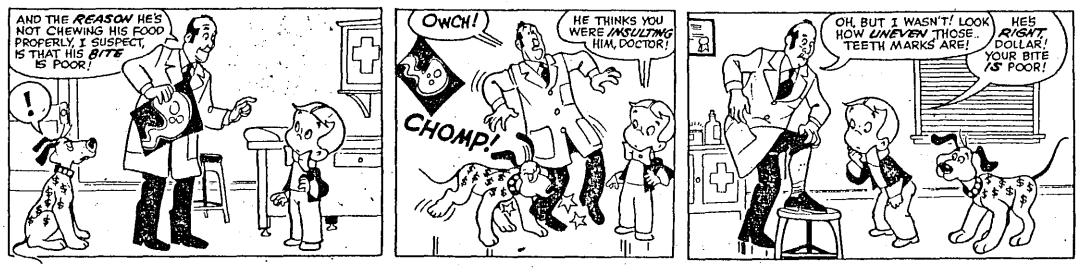
"See what, sir?" Carella said.

"Your identification." (McBain, *Axe*)

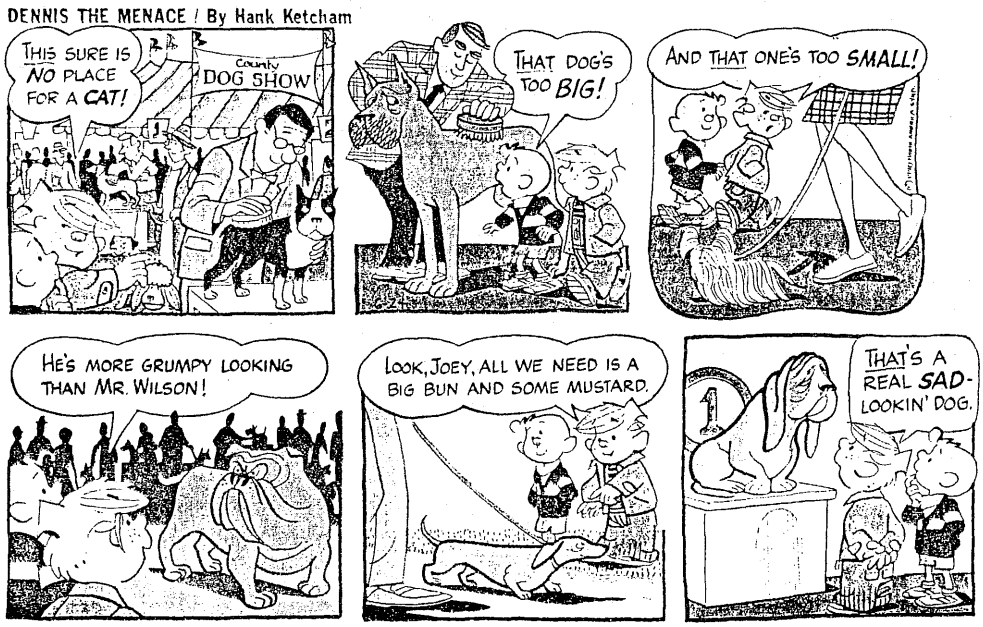
次の(25)や(26)の指示対象は聞き手の注意を喚起する必要があるため、thatで指示している。

(25)の３コマ目では、犬にかまれた跡をthose teeth marksのように話し手の手の届く身体部位をthoseで指示している。thoseで指示するのは、"Oh, but I wasn't!"と言いながらそれを既定的前提にしたことと、聞き手もそれを見ているため、既知であり容易に同定できると想定したためである。そして、それに加えて、この場面では犬のかむ力の弱いという証拠のため、犬の歯型がふぞろいであることに聞き手の注意を向けさせるためである。(26)では２コマ目、３コマ目、６コマ目にthatが使われている。この場面はDOG SHOWの現場であるため、指示対象である犬については、話し手と聞き手とも既定的である。それをthatで指示するのは、その種類が異なることを聞き手に喚起するためである。これらのthatは距離関係によって使われているのではない。

(25)



(26) DENNIS THE MENACE / By Hank Ketcham



日本語の指示詞では、現実に目の前にある指示物は常に直示的に指示され、照応的に指示されることはない［注３］。しかし、英語の指示詞では、本研究で観察しているように、指示物が目の前にあっても、それを直接的に指示するのではなく、頭の中に反射したその指示物のイメージや観念・記憶を間接的に指示する現象があるのである。そのとき、thatが照応詞となり、話し手の近くにある現実の事物を指しているような現象が起こる。また、指示対象は頭の中に移行する間に、既定的になる。これが本研究における仮説である。次節では、この仮説の妥当性についてアンケート法による検証を試みる。

5. アンケート法による検証

5.1. 検証の方法

検証の方法として、現場で知覚しているにおい、味覚、音などを指す指示詞を考察する。におい、味覚、音などを指す指示詞を考察するのは、第一に、それらは目に見えないもので、頭の中で思いめぐらす典型的な指示対象であるため、照応的にthatで指示されると考えるからである。第二に、それらは目に見えない具体的な形のないものであるが、それらの発生源である物が目の前にあれば、それは、におい、味覚、音などの具象物として、直示的にthisで指示されると考えるからである［注４］。

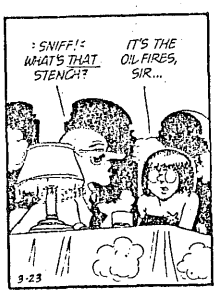
考察の方法として、まずコミックから採集したにおい、味覚、音などを指示している場面を観察する。その次に、英語を母語とするアメリカの大学院生１１人に対して行なったアンケートの結果を示す［注５］。このアンケート用紙は次のように作成した。におい、味覚、音などを指している漫画のなかから適当なものを選び、吹き出しにそれぞれの場面で記すような例文を記入した。そして、その例文の指示詞の部分を空白にし、その空白に入ることのできる最も適当な指示詞は、thisなのかthatなのかあるいはどちらでもよいのかを、直観で選択してくれるよう頼んだ。

5.2. においを指す場合

初めに、においを指す場合である。次の場面では、話し手はにおいの発生源を見ていない（(27)は１コマ目の段階で）ため、予想通り指示詞としてthatが使われている。

(27)

(28)



(29)

においを指す場合のアンケートとして、次のような場面を使った。(30)はにおいの発生源を見ていない場面、(31)はにおいの発生源を見ている場面である。

(30)

(31)

(30)と(31)の漫画の吹き込みには元のセリフを消して、下記のような文を入れた。ただし、(30c)と(30d)それに(31a)と(31b)の文は上の絵と状況が一致しないため、においの発生源を見ていない場合あるいは見ている場合という説明を与えて、文だけで答えてもらった。結果は右側の[　]にある通りである(数字はそれぞれの指示詞を選んだ被験者の人数)。

<(30)のにおいの発生源を見ていない場面>

(30a)	(　　) smells nice.	[this 1　that 9　どちらも可能 1]
(30b)	M-M-M. Now (　　) smells nice.	[this 0　that 10　どちらも可能 1]
(30c)	(　　) smells terrible.	[this 2　that 9　どちらも可能 0]
(30d)	M-M-M. Now (　　) smells terrible.	[this 0　that 11　どちらも可能 0]

<(31)のにおいの発生源を見ている場面>

(31a)	(　　) smells nice.	[this 6　that 4　どちらも可能 1]
(31b)	M-M-M. Now (　　) smells nice.	[this 3　that 7　どちらも可能 1]
(31c)	(　　) smells terrible.	[this 4　that 5　どちらも可能 2]
(31d)	M-M-M. Now (　　) smells terrible.	[this 2　that 8　どちらも可能 1]

右側のアンケートの結果から、においの発生源を見ていない(30)の場面では多くの被験者はthatを選び、においの発生源を見ている(31)の場面ではthisを選ぶ被験者が増えるということがわかる。前者のような場面では頭の中で知覚したにおいを照応的に指示するため、ふつうthatが使われるという仮説を証明することになる。また、後者の場面でthisを選んだ被験者は、においが発生している物が指示対象であると考えそれを直示的に指示したのである。

しかし、(30)の場面でもthisを選択した被験者がいる。そのため被験者がthisを選んだ理由について、次のように考えることもできる。例文のM-M-Mは、においを知覚してから少し間を置いて指示詞を発するという状況、すなわち、指示対象に対して既定的になっているという状況を設定した。被験者はどのように解釈したかはわからないが、(30)と(31)のどちらの場面においても、M-M-M.のある(b)と(d)は、(a)や(c)より多くthatが選ばれている。そこから判断すると、被験者はM-M-M.の間ににおいを意識のなかに定着させた(あるいは、においに慣れた)と見なしたため、thatを選び、今かいでいるにおいについてまだ意識のなかに定着していない(あるいは、そのにおいに慣れていない)と見なしたため、thisを選んだとすることができ、thatの指示対象は既定的前提があるという仮説の証明の一つになる。

上のアンケート結果からもう一つわかることは、よいにおいにはthis、いやなにおいにはthatで指示するというような心理的距離による使い分けは、全くないということである。よいにおい

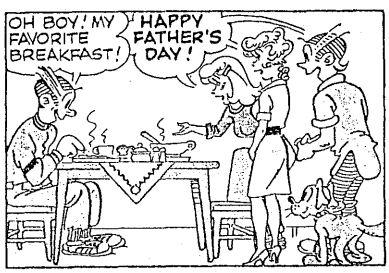
を指示するのは、(a)と(b)であり、いやなにおいを指示するのは、(c)と(d)であるが、においのよいわるいでthisやthatが選ばれていないのである。(このことは、よいにおいをthatで指示する(29)からもわかる)

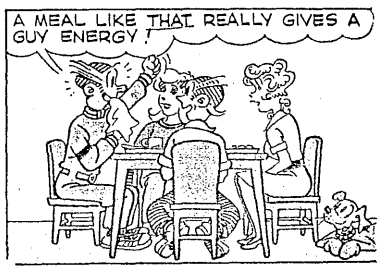
5.3. 味覚を指す場合

食べ物を指示する場合、食べているときはthisで、食べ終わったあとはthatで指示するとされる(Swan(1980: Entry 603))。次の(32)は食べているところ、(33)は食べ終わったところである。

(32)

(33)



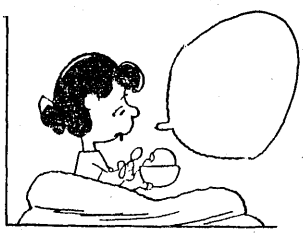


(32)は目の前にある食べ物をthisで直示的に、(33)は頭の中にある味覚をthatで照応的に指示していると仮定することができる。アンケートでは次のような場面を使った。

(34)

(35)

(36)



(34)〜(36)の吹き込みに入れた文と、結果は次の通りである。

<(34)の場面>

(34a) (　　) tastes good.　　[this 11 that 0 どちらも可能 0]

(34b) Mmm. Now (　　) tastes good.　　[this 7 that 3 どちらも可能 1]

<(35)の場面>

(35a) (　　) tastes bad.　　[this 6 that 3 どちらも可能 2]

(35b) Mmm. Now (　　) tastes bad.　　[this 4 that 6 どちらも可能 1]

〈(36)の場面〉

(36a) (　　) doesn't taste like mint.　　[this 7　that 0　どちらも可能 4]

(36b) Mmm. Now (　　) doesn't taste like mint. [this 5　that 4　どちらも可能 2]

(34a)の場面では、すべての被験者はthisを選択した。食べている物を直示的に指示すると考えるためである。しかし、(34b)のMmm.の後ではthatも使えるとする被験者がいる。味が意識のなかに定着して頭の中の味覚を指示すると見なしたためである。次の(35)の場面は判定が分かれる。それは、絵の状況からまだ食べている最中とも食べ終わったところとも判断できるからである。あるいは、絵の顔の表情が尋常でないため、(35a)でthatを選んだ被験者は、すでに味のひどさについて意識のなかに定着していると見なし、(35b)のMmm.の後でもthisを選んだ被験者は、逆に、味があまりにひどいので、その味がまだ意識のなかに定着できないでいると見なしたからであろう。ただし、Mmm.の後ではthatを選ぶ者が多い。三番目の場面である(36a)では、目の前のミントを直示的に指すと考える被験者が多い。thatでも可能とした被験者は、絵の「ミントのような味」と頭の中で思いめぐらす味覚を照応的に指示すると見なしたのである。そのように考えた被験者は、(36b)のMmm.の後ではより多くなる。

5.4. 音を指す場合

次は音を指す場合である。(37)は音の発生源がわからないため、においを指す場合と同じように、照応的に指示するためthatが使われている。(38)において、上の場面でthisが使われているのは、音楽が鳴りはじめたばかりであるため、あるいは、具体的なsongを直示的に指示するためである。その下の場面でthatが使われているのは、音楽が意識のなかに定着したため、あるいは、抽象的なmelodyを照応的に指示するためである。

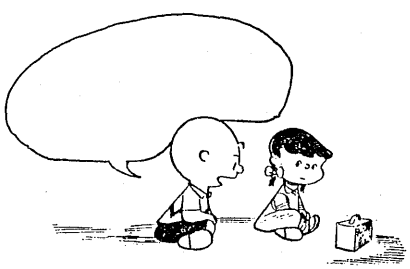
(37)

(38)

アンケートは次の場面を使った。(39)は音の発生源が目の前にない場面、(40)は音の発生源が目の前にある場面である。

(39)

(40)



(39)と(40)の吹き込みに入れた文と、結果は次の通りである。

〈(39)の音の発生源が目の前にない場面〉

(39a) (　　) sound is nice.　　[this 0　that 11 どちらも可能 0]

(39b) M-M-M. Now (　　) sound is nice.　　[this 0　that 11 どちらも可能 0]

〈(40)の音の発生源が目の前にある場面〉

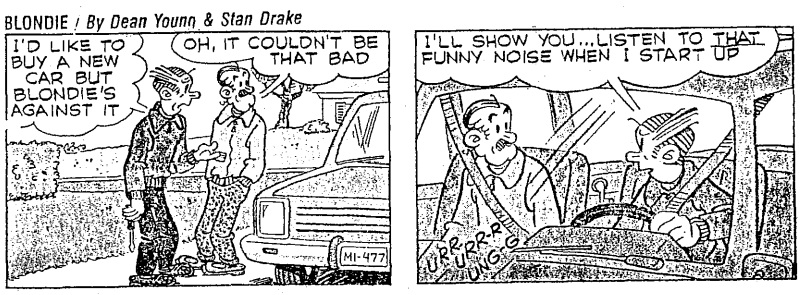
(40a) (　　) is a nice melody.　　[this 2　that 5　どちらも可能 4]

(40b) M-M-M. Now (　　) is a nice melody.　[this 3　that 7　どちらも可能 1]

(39)の音の発生源が目に前にない場面では、すべての被験者はthatを選択した。頭の中で知覚した音を照応的に指示するのは、thatであることがわかる。また、この場面でthisが選択されなかったのは、絵の話し手の表情から、聞いている音は既定的になっていると見なしたためである。(40)の音の発生源が目の前のある場面で、thisを選択するのは、その発生源を直示的に指示するためであろう。しかし、(40)の場面で、thatの方が多く選ばれているのは、指示対象を抽象的なmelodyにしたためと推測している。

ところで、次の(41)の２コマ目の場面で、目の前から発する音をthatで照応的に指示しているのは、話し手がその音に対して既定的前提をもっているからである。だが、文脈から聞き手はその音のことをまだ知らない。そのため、thatを用いることによって、話し手の性急な気持ちを表している。

(41)



以上、仮説の妥当性について検証を試みた。においや音を指す場合、その発生源が見えない状態では、頭の中で知覚したにおいや音を指示することになる。その指示詞として、アンケートでは、ほぼthatが選ばれた。これは、thatが頭の中にある指示対象を指示するという本研究の仮説の妥当性を示している。また、アンケートのすべての場面で、thatはM-M-M.やMmm.の後の方で、より多く選ばれた。これは、thatの指示対象は既定的になることを示している。

6. 結論

本研究では、話し手の近くにある事物を指しているように見える英語の指示詞thatを考察し、そのようなthatの指示対象あるいはそのような現象が起こる状況について論じた。主張は次の二点である。第一に、そのようなthatは、話し手の近くにある現実の事物を指示しているのではなく、話し手の頭の中に反射したその事物のイメージまたはその事物についての観念、概念、記憶などを、照応的に指示しているのである。第二に、そのようなthatの指示対象は、話し手の頭の中に移行する間に、話し手の意識のなかに定着して、既定的な指示対象になっているのである。

本研究では、５節で、この主張の妥当性についてアンケート法による検証を試みた。数量間の統計的な有意差は期待できないが、主張の妥当性の方向は示されている。

付記…本研究は、第１０６回日本言語学会（1993年 6月）において口頭発表したものに加筆、修正を施したものです。本研究をまとめるにあたりご指導いただきました筑波大学　芳賀純教授、斎藤武生教授、早稲田大学　矢野安剛教授、インフォーマントとして快く協力して下さったロナルド・クレイグ氏に、心から感謝いたします。またアンケートに尽力していただきました金久保紀子氏、十島真理氏、田中彰氏にお礼申し上げます。しかし、本研究の誤りは、言うまでもなく、筆者に責任があります。

【注】

１）　本研究では、頭の中に反射した指示対象あるいは意識のなかに存在する指示対象を間接的に指示する場合も照応的指示であると考えている。Lyons(1977:672)でも、初めて指示する場合でも談話の場で顕著であれば、照応的指示であるとする。例えば、妻を交通事故で亡くした友人に対する哀悼のことばとして、次のように言うとする。'I was terribly upset to hear the new: I only saw her last week.' このとき、the newsは何のニュースかherは誰であるかは談話の場で顕著であるため、前もって言及しておく必要はないとする。

一方、直示的指示とは、テキスト外にある指示対象を初めて指示する場合であるが、本研究では、話し手の意識のなかに存在するあるいは存在しないにかかわらず、現実界にある指示物を直接的に指示する場合であると考えている。

２）　中右(1981)は、主動詞の補文として生ずるthat節の既定性と非既定性の区別が、変形論的現象とどのようにかかわり合うかについて論じており、指示詞thatには言及していない。

３）　金水・田窪(1990)では、指示詞が選ばれる順位を「指示トリガー・ハイアラーキー」と名づけ、日本語では、次のように現場指示の指示詞が最優先に指示トリガーに選ばれるとする。

現場＞経験スペース＞＞その他

４）　日本語の指示詞では、現場で知覚しているにおい、味覚、音なども直示的に指示される傾向がある。なぜなら、現場で知覚しているにおい、味覚を指す場合、「このにおい／この味」と、直示的指示の色彩が濃い「これ」（cf. 金水・田窪(1990)）が使われるからである。「あのにおい／あの味」となると過去に知覚されたものになる。音は、「この音／あの音」となるが、それも音の発生現場までの相対的な距離の遠近で使い分けられる。

５）　被験者は全米科学財団（ＮＳＦ）が日本語研修のため派遣したアメリカ人理系大学院生。

【引用文献】

千葉修司・村杉恵子　1987　「指示詞についての日英語の比較」『津田塾大学紀要』 19: 111-153.

Fillmore, Charles　1982　Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis. in R. J. Jarvella and W. Klein (eds.) *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*, 31-59. Chichester/New York: John Wiley & Sons Ltd.

Gundel, Jeanette, Nancy Hedberg and Ron Zacharski　1989　Givenness, Implicature and Demonstrative Expressions in English Discourse, *Papers from the 25th Annual Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, Part Two, Parasession on Language in Context*, Chicago Linguistic Society, 89-103.

Hawkins, John　1978　*Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and grammaticality prediction*. London: Croom Helm.

金水　敏・田窪行則　1990　「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』　vol. 3　日本認知科学会／編　講談社

国広哲弥　1985　「マンガの言語学」『月刊言語』 14-11　ジュニア版 19, vii.

Leech, Geoffrey and Jan Svartvik　1975　*A Communicative Grammar of English*. London: Longman.

Lyons, John　1977　*Semantics*: 2. Cambridge: Cambridge UP.

----------　1981　*Language, Meaning & Context*. London: Fontana.

中右　実　1981　「変形と意味の原理」『英語青年』127. 7.1-6.

小笠原林樹　1984　「教師のための基礎英文法・語法(11)」『英語教育』32-12, 35-37.

Quirk, Randolph et al.(eds) 1985　*A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Swan, Michael　1980　*Practical English Usage*. London: Oxford UP.